■このコーナーを担当したのは、
初澤（はつざわ） とし子（こ）さん（木戸）

地域のセンターが世代を超えたふれあいの場に

筑西市が誕生して3年。様々なものが従来通りではなくなり、方向転換がせまられています。公民館など施設の有料化もその一つ。そこで身近にあるセンターの活用を見直してはいかがでしょうか。関城地区ではほとんどの集落にセンターがあり、会合や行事の拠点となっています。センターを地域のコミュニケーション作りに利用している、木戸集落の活動を紹介します。

子どもと一緒に懐かしい遊びを

木戸田園都市センターの入口付近にある花壇は、植え付けから水やり、暑い中での除草や花がら摘みなど、長寿会の人たちが心を込めて手入れをしています。昨年はカンナが植え付けられ、大人の背丈ほどに伸びた色とりどりの花で迷路が作られました。

まだ暑さの残る9月の初め、子どもたちは喜々として、カンナの迷路の中に入っていきます。センターの中では、紙芝居や風船細工、ちぎり絵や折り紙。おやつや手作り弁当も用意されています。外にはヨーヨー釣りもありました。この日は、年に一度、長寿会が地域の子どもたちをセンターに招待する日。子どももお年寄りも、一緒になって昔の遊びを楽しみ、交流を深めていました。

木戸集落の長寿会は会員58人。2年前から子どもたちとの交流行事を行っています。会長の飯田芳勝（いいだよしかつ）さんは「長寿会といってもまだまだ元気。いたわられるばかりでなく、何か地域の役に立ちたいと思って始めたんですよ」と話してくれました。今年も8月末の実施に向けて、花壇の手入れに余念がありません。

30年続くセンターでの交流

友希（ゆうき）会は、昭和52年に地元の主婦が集まり、設立されました。現在会員は女性29人。当初から会長を務める小山光子（こやまみつこ）さんのもと、積極的に奉仕活動を続け、今では地域の行事になくてはならない存在となっています。友希会が、約30年間自主的に行っているのが敬老招待です。毎年一回、友希会と長寿会がセンターに集まり、楽しいひとときを過ごします。

春にはまだほど遠い寒さの2月末。でも、センターの中はまるで春のようなにぎわいです。男の人も女の人も手を取り合ってダンスをしています。輪投げの競争をしたり、手遊びをしたり、くじで当たるプレゼントに一喜一憂…。テーブルの上には、前の晩から準備して作られたごちそうが並んでいます。今や食卓から消えつつある一昔前の家庭料理。懐かしさに箸も進みます。楽しい時間はあっという間に過ぎ、来年もまた元気で出てくることを約束して、名残惜しくもお別れします。

地域の活性化が叫ばれている今、ここにはその基礎ができていることを実感しました。今後ますます進む高齢化社会にあって、自分の足で出かけられる身近な場所での交流は不可欠だと思います。各集落のセンターがそんな場所になることを願ってレポートしました。

▲取材の当日、花壇の手入れに来ていた長寿会のみなさん（右端が市民記者の初澤さん）